

各 位

平成 17 年 2 月 1 日

会社名 イーシステム株式会社
(コード番号: 4322)
代表者名 代表取締役社長 渡辺 博文
問合せ先 管理本部 本部長 大西 浩之
(TEL: 03-5781-8763)

会計監査人の変更に関する補足 および 平成 17 年 1 月 27 日付け日経金融新聞の記事について

1. 会計監査人の変更に関する補足

当社は、平成 16 年 12 月 24 日開催の監査役会決議により、会計監査人であった中央青山監査法人を解任し、ASG 監査法人を一時会計監査人（仮会計監査人）として選任いたしました。中央青山監査法人を解任する理由となった認識の相違は、以下の二点です。

(1) 取引先からさらに先の取引先に対する取引確認の要請

中央青山監査法人は、当社と取引先との取引確認に加え、取引先からさらに先の取引確認を当社に要請してきました。

この要請に対して当社は 通常の監査の範囲を超えていること、この取引確認を実施することで、当社の取引先とさらに先の取引先との間の守秘義務を侵害しかねず、当社の社会的信頼性を著しく毀損する可能性があること、を理由に確認状発送に協力できない旨を回答しました。

(2) アソシエントテクノロジー社開発のソフトウェアに関する資産性について

当社が販売用ソフトウェア資産として保有しているアソシエント社開発のソフトウェアに関して中央青山監査法人より資産性の検証を要請され、対応いたしました。

この結果、中央青山監査法人から、当社がアソシエント社から購入した 10 種類のソフトウェアの内容は酷似しており大部分のソフトウェアに資産性が無いと判断すべきとの報告がありました。当社では、この意見は同監査法人による検証作業におけるミスを原因とした、誤解に基づく断定的判断であると考えており、その点を正すべく協議を行いましたが見解の一致を見ることはできませんでした。この一連の協議の中で相互の信頼関係が大きく損なわれました。

当社は、それまでの経緯も含め、第三者の弁護士に相談いたしました。その結果、(1) の確認書は当社の信用を毀損するものであり、かつ他社の企業秘密の開示を求めるものであるため、会計士が職務上負っている善管注意義務（民法 644 条）に違反するとの判断を得ました。この結果をもって、当社監査役会が審議し、同監査法人を当社の会計監査人として解任いたしました。

2．平成 17 年 1 月 27 日付け日経金融新聞の記事について

平成 17 年 1 月 27 日付け日経金融新聞の「スクランブル～IT 粉飾、広がる波紋」という掲載記事において、アソシエントテクノロジー社の粉飾決算について、当社との取引が粉飾の発端であるかのような記載がありました。

アソシエント社に対して、「ある取引先」から入金があった際、別の企業に一部を振り込んで欲しいと要請を受けたことが粉飾のきっかけであり、入金額約 6000 万円のうちアソシエント社が数%のサヤを抜いて残りを入金し、これを適当な名目で前渡金として計上した。これを、前社長が「同様の操作を繰り返すことで利益操作に利用できることを思いつき、まもなく粉飾が始まった」と記述されています。

そのうえで、「ある取引先」とはイーシステムであると断定することで、あたかも当社がアソシエント社の粉飾の原因であるかのような書き方となっています。

アソシエント社の平成 16 年 12 月 28 日付けプレスリリース「決算の取りまとめ及び調査委員会による調査結果についてのお知らせ」に【本来であれば支払時の事業年度の費用で処理すべきものを前渡金として資産計上し、費用を繰り延べる形で過大な利益を計上していた。】と報告されているとおり、この取引は、外注費として計上されるべき費用を、前渡金として資産計上することで、利益操作を行ったものです。

つまり、紛れもなくアソシエント社自身の判断で当初から粉飾する意思をもって粉飾を行ったものであり、記事にいうところの「ある取引先」からの要請によって何かを思いついて「まもなく粉飾が始まった」という性質のものでは、全くありません。

たとえ、当社から発注した仕事であっても、受注したアソシエント社がそれをまるごと他社に発注したり、会社内部で分割して損益を調整したり、費用を前渡金として繰り延べたりしたのは、アソシエント社経営の独自判断で行われたものであり、何ら当社と関係するものではありません。このような利益操作が繰り返されたのであれば、売上と原価がそもそも対応していないことは明白であり、これを見逃してきた旧経営陣、会計監査人等の責任は、重大なものであると当社は認識しております。

当社は、取引先であったアソシエントテクノロジー社を含め近時発生した様々な事例を教訓として、コンプライアンス及びガバナンスの一層の強化を図る所存です。引き続きのご理解と一層のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。